

保育における職業奉仕

「職業奉仕」について、私自身の保育の仕事を通して感じていることをお話しさせていただきます。

ロータリーでいう「職業奉仕」とは、自分の仕事を通して社会に貢献することだと学びました。職業はただ生活のためにあるのではなく、社会に役立てる使命を持っている。そう考えると、自分の毎日の仕事が、社会をより良くしていく力になるのだと思えてきます。

私の仕事は「保育」です。子どもたちと毎日を共に過ごし、成長を支えることが仕事です。

私たちが「子ども主体の保育」を大切にしようと考えようになったのには、きっかけがあります。かつて保育の現場では、一斉に活動することが当たり前のように行われていました。朝の会に参加できない子を無理に座らせたり、給食を食べられない子に完食を促したり。そうした姿は、子どもにとって苦しいだけでなく、保育者にとっても決して最善ではありませんでした。

先生が一方的に選んだ保育や指導を押しつけても、子どもも保育者も幸せにはなれない。その思いが、「子どもに無理強いしない保育」への強い決意につながりました。

こうした経験から、私たちは、「子ども主体の保育」を実践するようになりました。子どもの小さなつぶやきや発見から活動を広げていくのです。例えば、公園で拾った石から「石研究所」という取り組みが始まったことがあります。子どもたちは図鑑で調べたり、絵を描いたり、保護者に聞いてみたりしながら、石の世界をどんどん広げていきました。そんな姿に寄り添い、応援することが、私たち保育者の大切な役割だと思っています。でも、保育は、子ども任せにするだけでは成り立ちません。私たちは「共主体」、つまり大人と子どもと一緒に考え、歩んでいくことを大切にしています。

子どもは私たちの思い通りには動いてくれません。だからこそ、子どもとのやりとりの中で新しい工夫や気づきが生まれます。その関わりは、誠実さや信頼を基盤にしています。これはまさに、ロータリーの「職業奉仕」の精神と重なっていると感じます。

私にとって保育という仕事は、子どもたちの未来を育てること、保護者の安心を支えること、そして地域に笑顔を広げていくことです。日々の小さな営みの積み重ねが、確実に社会を支える力になっています。「こどもも大人も、毎日を輝かせる保育」という私たちの理念は、まさに職業奉仕の実践そのものだと思っています。

職業奉仕は特別な活動ではなく、毎日の仕事の中でどう人と向き合い、どう社会に関わるかという姿勢にあると思います。これからも私は、保育という仕事を通して、地域に奉仕し、子どもたちの笑顔と未来を守っていきたくないと願っています。